

2020年2月28日

2019年度聖路加国際大学大学院課題研究

論文題目

「無痛分娩を選択し、出産した女性の体験～
出産に対する価値観に焦点をあてて」

**「Women's Experiences with Neuraxial Analgesia
in Relationship to Their Childbirth Values」**

18mw006

越塚 優佳

論文要旨

目的

自然分娩が主流であった我が国において、近年、無痛分娩が急増している。無痛分娩を選択し、出産した女性達の体験を記述し、出産に対する価値観を探索する。これにより、無痛分娩を選択する女性の支援に示唆を得る。

方法

質的記述的研究。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号:19-A051)を得て、実施した。正期産で分娩時に硬膜外麻酔、または脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔を用いて経膈分娩した初産婦 2 名、経産婦 2 名にインタビューを行った。分析は、グレッグ(2016)を参考に行った。

結果

AさんとFさんは妊娠前から、「出産の痛みは我慢する意味のない、出産に必要がないもの」という強い価値観を持っていた。そのため、迷うことなく無痛分娩を選択した。いつでも麻酔が使えるという安心から実際に陣痛も体験してみたが、耐えがたい痛みであることを実感し、無痛分娩は自分の理想の出産に必要な不可欠であると納得した。よって AさんとFさんは無痛分娩による出産に十分に満足し、次の出産の機会では、陣痛の痛みについても知っているので、早く無痛分娩を開始したいと迷いはない。

Bさんは、「陣痛は乗り越えるべきもの」という価値観を持っていた。そのため、第1子分娩時には自然分娩を選択したが、あまりに長く辛い分娩となり、助産師から無痛分娩を提案され、実施した。この経験により、「自分は無痛分娩じゃないと産めない」という価値観がBさんの中に形成された。これにより第2子分娩では最初から無痛分娩を選択したが、今度は全く痛みなく出産できてしまった。それゆえ産んだ実感や達成感は得られず、産む瞬間の痛みを回避するために無痛分娩を選択したことに、Bさんは罪悪感を抱いている。陣痛への恐怖と楽に産めてしまう罪悪感との間で葛藤し、Bさんの価値観は揺らいでおり、次の出産への希望は曖昧なままである。

Eさんは、不妊治療の痛みの経験から、「痛みは身体だけでなく心にも負の影響を及ぼすもの」という価値観を持ち、産後に心身の余力を残したくて無痛分娩を選択した。鎮痛効果によって落ち着いて出産に臨むことができ、分娩直後は満足していたが、「痛みを乗り越えて出産した経験と達成感」という周囲の声に触れ、自尊心が徐々に低下した。これにより、「無痛分娩は自分に必要なものである」という価値観が大きく揺らいだ。それでもEさんにとって、産後に余力が必要である。よって全面的に支持するわけではないが、また無痛分娩をしたいと考えている。

結論

妊娠期から出産に対する価値観を話し合い、無痛分娩に何を期待しているのかを女性と共有する関わりが医療者に求められる。ことに、麻酔の使用に迷う女性には、意思決定の支援が重要である。女性の価値観を尊重したケアを行うことで、女性は自分に合った麻酔の使い方を選択することができる。また、女性の自尊心が保たれ、より良い出産体験を得ることができる。